JOSHIBI no.173

岩岡ヒサエ

あきらめずに、やりぬく。その一心だった。

マンガへの情熱を失った4年間を経ての再挑戦。それは定職を絶っての、きびしい修行の日々だった。2011年に「土星マンション」で文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞を受賞し、人気マンガ家への仲間入りをはたした岩岡ヒサエさんの、これまでの歩みに迫る。

Artwork 岩岡ヒサエ　Photo 小野慶輔　Text 立古和智

子どもの頃から、マンガ家になることを夢見てきたのですが、女子美に入った直後に挫折したのです。「何を描いても人のまね。全然自分らしさがない」と。そのまま全然描けなくなり、在学中はマンガから完全に遠のきました。大学で専攻していた油彩についてもしかり。いくらでもキャンバスに向かっていられる同級生を目にして「自分にはそこまでの情熱はない」ことを悟りました。就職先にゲーム会社を選んだのは、絵やイラストはダメでも授業で経験した彫塑は頑張れたから「3DCGだったらやれる！」と思ったのです。ゲームのことは何も知らず、後から苦労しましたけどね（笑）。大きな挫折を経て、またマンガに向かう気になったのは、会社員になった最初の年です。趣味で一作だけ、自分の気持ちをマンガに描いてみたら、不思議なくらいすんなりと描けたのです。以前とは違ってマンガありきではなく、描きたいことありきだったのが良かったのでしょう。そのことは肌感覚で理解できました。ここを境にマンガ熱は再燃、２００２年に「ゆめの底」という作品で月刊「アフタヌーン」の四季賞佳作をもらうに至ります。

岩岡ヒサエ

1976年千葉県生まれ。1998年芸術学部絵画科洋画専攻卒。2002年に「ゆめの底」でアフタヌーン四季賞佳作に入選。2004年に「しろいくも」で「月刊IKKI」第7回イキマンを受賞。2009年に青木俊直、イシデ電、志村貴子、谷川史子らと同人サークル「腹ペコ戦隊はしレンジャー」を結成。2011年に「土星マンション」で、第15回文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞を受賞。イラストレーションの分野でも活躍中。http://moinmoin.fc2web.com/

自分にとって一番の転機となったのはこの入選でも、デビューでも、メディア芸術祭での受賞でもなく「食べられなくてもマンガを選ぶ」と決意したときです。2003年に定職を絶って、マンガに集中したのですが、あのときは「悩むくらいなら、やってみよう」「マンガなら苦しくても続けられる」という思いでした。そこからは収入は絶たれ、貯金を食い潰しながら、担当さん（面倒を見てくれていた編集者）に、下書きや作品案にダメ出しをもらい続ける日々。いつまで続くかわからないから本当に辛かったし、リアルにひもじい思いもしました（笑）。私の場合、一度はあきらめた夢への再チャレンジでしたから、絶対にあきらめず、失敗しないようにやる、という意識でしたね。担当さんから指導を受けたのはこのときがはじめてです。最初は誰しも自作に口出しされることには抵抗があるはずですが、そこはしっかり耳を傾けながら直していく。すると確かに作品は読みやすくなるし、腕も磨かれます。私の場合、マンガの王道を許容できるようになりました。以前はオタク、サブカルなものが格好良くて、ありがちな展開や、売れ線なものに対して斜に構えていたのが「いいものはいい」と素直になれたのです。そんな修行の日々も「花ボーロ」で連載がスタートした2004年末で終了。1年間で済んだから、私は運が良かったと思います。第15回文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞を受賞した「土星マンション」には、前身となる「土星ホテル」という短編がありました。このアイデアを気に入ってくれた担当さんがいたから世に出せた作品ですが、気に入ってくれる人ばかりではなかったというのが本当のところです。実際、世の中には最初は誰からも相手にされなかったのに、あるとき運をつかんで大化けした作品もたくさんあります。だから自分でいいアイデアだと思ったら、周囲からの感想には耳を傾けながらも大事にすべき。本当にいいアイデアって、感覚的にピンとくるものだと思います。私の場合、創作のアイデアは日常の出来事や、人との関わりから得ています。そういったものを上手に拾い上げる力も大事。マンガから離れた大学生のときに合唱やお芝居に熱中し、いろんなバイトを経験したことも、今となってみれば大きな財産です。美大生って、いつも課題制作に追われて大変でしょうけど、それ以外のことにも積極的に手を伸ばしてほしい。悩んだことだって、挫折したことだって、すべての経験が、いつか生きてきますからね。私にとって、マンガは仕事でなくなっても描き続けるもの。すでに生活の一部ですし、いくつになっても続けたい。煮詰まって苦しむこともありますが、ときに自分の考えも及ばないほど、登場人物が生き生きと動きだすこともある。そうなるとアドレナリン全開。描いていて、すごく気持ちがいいんです。

みんなが心から楽しめるアートを、10人の手から。

文化祭における一回限りのパフォーマンス、のつもりが、気がつけば活動歴は3年目に。そして若手アーティストの登竜門「GEISAI#16」でグランプリを受賞するという快挙を成し遂げた「愉嗚呼社(ゆああしゃ)」。女子美の付属高校から生まれた、このパフォーマンス集団の魅力とは。

取材・文　立古和智　写真　MIHO

「知識がないと楽しめないアートではなく、もっと感覚的に楽しめるアートを」

そう口を揃えるのは、芸術学部2年次に在籍するパフォーマンス集団「愉嗚呼社」の10人。そのはじまりは、彼女らが付属高校にいた頃にさかのぼる。

「みんなが、ダンス、ファッション、演劇など、さまざまな部活で培ってきたことを総合して、舞台でパフォーマンスをしたのが高校3年のときの文化祭。泣いてくれた観客もいましたし、私たち自身も、感極まって泣きました」

最初で最後のつもりが、その後も周囲からの呼びかけに応じることで、愉嗚呼社での活動は継続していくことに。そして若手アーティストの登竜門「GEISAI#16」への出展。ここでは来場者からの投票数によって勝敗が決まる「ポイントランキング部門」で、見事グランプリを獲得するという快挙を成し遂げるに至る。

「一番印象に残るパフォーマンス。観る側が楽しむためにも、まず自分たちが楽しむ。これらを心がけた結果、多くの人に伝わったのだと思います」

語弊を恐れずにいうなら「見かけでの勝負」。事実、表面的な「わかりやすさ」は愉嗚呼社が掲げるポリシーのひとつ。それは冒頭にも記した通り、アートに付きまとう堅苦しさに対するアンチテーゼである。コンセプトが肥大化し、予備知識なしでは理解しにくいアートの類とは真逆にあるわけだ。

「だからといって見た目だけで、底の浅い作品には絶対にしたくない。実際10人が集まれば、手を動かしている時間よりも、みんなして頭を働かせている時間のほうが圧倒的に長いのです」

コンセプト、メッセージ、やりたいこと、表現――アートに付いて回る、さまざまな要素のバランスをはかりながら模索を続けるのが目下のところ。そして、毎回の発表をステップに、飛躍する過程にあるのは若いアーティストならでは。発展途上だからこそ表現手段はひとつに限定しない。先のビジョンについてもほぼ白紙の状態だ。

「今は目先の作品を、最高のものにすることで精一杯。ユニークなメンバーの個性を、存分にぶつけ合いながら相乗効果で楽しいものを生み出したい」

こうした活動にオープンな女子美での4年間も、GEISAIでの受賞も、あくまで通過点に過ぎない。彼女たちの挑戦は、いまだ序章を終えたばかりである。

愉嗚呼社(ゆああしゃ)

2010年、女子美術大学付属高等学校に在籍していた13名によって結成。「心を動かす」を目的に、さまざまな表現を発信中。現メンバーの10名は、本学芸術学部洋画専攻、立体アート専攻、ヴィジュアルデザイン専攻、工芸専攻に在籍。「GEISAI #16」のポイントランキングでグランプリを受賞。http://youareshocked.xxxxxxxx.jp/

○前列左から
エミリー吉元、かわまたみづき、はなえたす、フォン田中
○中列左から
pp モモコ、まっぱーやん、スーカネダ
○後列左から
増田薫子、すがあやか、さくスケ

ぼくらの仕事は、まず社会のためにある。

11月3日に劇場公開されるドキュメンタリー映画「天のしずく～辰巳芳子 いのちのスープ～」で監督・脚本をつとめた河邑厚徳先生と、その題字をデザインした粟辻美早先生。ともに「創る」「伝える」を日常とするおふたりに、仕事に向かう際の姿勢について聞いた。

取材・文　立古和智　写真　MITO

粟辻　この映画で料理家、辰巳芳子さんの姿を拝見し、食とデザインのクリエイティブな面に共通性を感じました。

河邑　辰巳さんは「丁寧に作ることは丁寧に生きること」と言います。粟辻さんご自身の「丁寧に作ることは丁寧に生きる」にもつながっているのでは？

粟辻　ええ、そうだと思います。

河邑　今回はじめて映画を撮ってみて、真っ暗な映画館でできることとは、じっと作品に集中してもらい、眠っていた柔らかい感覚を呼び覚まし、自由に涙を流してもらうことだと思いました。

粟辻　私、本当に感動して泣きました（笑）。河邑先生にとって映像ジャーナリズムの醍醐味とは何でしょうか？

河邑　基本的には人を描くことが好きなのです。ある人に興味があって、その人の魅力を伝えるために撮影する。そして作品として再構成した結果、その人から「私の知らなかった私がそこにいる」と喜んでもらえるとうれしい。

粟辻　私は「デザイン＝人とのつながり」だと思っているんです。デザインには依頼主と消費者がいて、デザイナーはそこをつなぐ役回りでもある。依頼主とは直接話をしたいし、可能な限り関わっている方たちとも話をしたい。その上で仕事を進めていきたいのです。

河邑　それは映像作品を創造する際のポリシーとも近い気がします。僕の先生のひとり、新藤兼人監督は「映画は集団創造だ」と言いました。照明、カメラ、監督など、各自の専門は違っても上下関係はない。集団として同じ方向を向いたときに優れた作品が生まれるという考え方で、それはものづくりの基本です。粟辻さんのされていることも似ています。あとポリシーというか、どんな仕事でも自分なりの問題意識を持って臨むと、自分の仕事に変えられて、モチベーションが上がります。学校のカリキュラムや課題もしかり。問題意識を持って、自分のものにしてほしいですね。

粟辻　そうですね。私も仕事では「頼まれたままに作る」ではなく「本当にやるべきこと」をクライアントとともに熟考します。例えば「ロゴを変えて」と頼まれても、場合によっては「変えないほうがいい」と提案するし、やる必要のあることだけを納得した上でやりたい。表面的な仕事は、したくないですよね。

河邑　とはいえ、趣味でやっているわけではないので、自分の仕事の背景には、必ず公的なことが第一義としてあります。それは粟辻さんも同じなはず。今回の映画もそうでしたが、僕の仕事だったら「今の社会には、こんなメッセージを伝えるべき」が必ずあります。

粟辻　先生のおっしゃる通りで、私も自己満足のデザインは絶対にしません。美しくて品があり、人の生活を豊かにするデザイン。静かにそばに置いてもらえるデザイン。それが私の理想です。

粟辻美早

アートディレクター、グラフィックデザイナー。本学芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻准教授。1988年多摩美術大学デザイン科グラフィックデザイン専攻卒。1991年CRANBROOK ACADEMY OF ARTデザイン科で修士号を取得。TAMOTSU YAGI DESIGNを経て、1995年株式会社粟辻デザイン設立。日本グラフィックデザイナー協会、日本タイポグラフィ協会会員。

河邑厚徳

映像ジャーナリスト、映画監督。本学芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域教授。東京大学法学部を卒業後、NHKに入局。現代史、芸術、科学、宗教などをテーマにしたドキュメンタリーを制作。代表作に「アインシュタインロマン」(NHK／DVD)、「エンデの遺言・根源からお金を問う」「日本その心とかたち」「チベット死者の書」(スタジオジブリ／DVD)など。

天のしずく 辰巳芳子"いのちのスープ"

料理家・辰巳芳子が、病床の父のために作り続けたスープは、人々を癒す「いのちのスープ」として全国に広がる。食べものをつくり、食すことを通じて、人としてのあり方や、尊厳を探る物語。2012年11月3日劇場公開。http://tennoshizuku.com/

「自然と人間の結びつき、人と人のつながり、一場面一場面の構図、色彩、線と光。これらの見事な表現に、清々しい、豊かな気持ちでいっぱいになりました」(佐野ぬい／洋画家、本学前学長)

女子美オープンキャンパス 2012 開催

7月15日・16日の2日間にわたり、相模原キャンパスと杉並キャンパスの両キャンパスにてオープンキャンパスを開催いたしました。各分野の特性を生かした模擬授業やワークショップを数多く実施。自分で染めた藍染のハンカチや、加工を施した石や木のアクセサリーを手にした参加者の方々からは「来年もまた来てみたい」との声が寄せられました。また在学生による大学紹介、ツアーなども大変好評でした。

収蔵資料でたどる 111年の女子美の歩み

5月17日、杉並キャンパスに開設した歴史資料展示室。同日に開催された開設記念式典では、初代校長、藤田文蔵先生に関連した作品を寄贈いただいた羽生ご夫妻をはじめ、寄付をいただいた本学同窓会に、大村 智理事長より感謝状を贈呈いたしました。

本学は、1900年、〈芸術による女性の自立〉〈女性の社会的地位の向上〉〈専門の技術家・美術教師の養成〉を設立趣旨とし創立しました。本展示室はこれらの建学の精神を今に伝え、創立者・功労者を顕彰することを目的にしています。

開設記念展として『収蔵資料にみる女子美の歩み』を開催（～10月28日）。創立まもない明治期の文書資料や校名板、学生作品が表彰された東京大正博覧会の銀牌、藤田文蔵先生の作品などを展示しました。普段、なかなか目にすることのできない資料の数々に来場者からは「歴史の教科書を見ているよう」との声があがりました。

なお、歴史資料展示室には美術館コレクション展示コーナーも設置。9月19日～10月28日には「江戸時代裂（きれ）」を展示しています。

夏の涼は、女子美オリジナルてぬぐいで！

7月31日から8月14日まで、伊勢丹新宿店にて本学学生が制作したてぬぐい素材のアイテムを紹介する「b•tan ぬぐい展」が開催されました。"b•tan ぬぐい"とは、ちょっとした染めムラや織りキズがあるために規格外として処分されていた注染布＝B反をリサイクルすることで製品化しようとスタートしたプロジェクトです。伝統の形ばかりではなく、新しいデザインにも積極的に取り組んでいます。

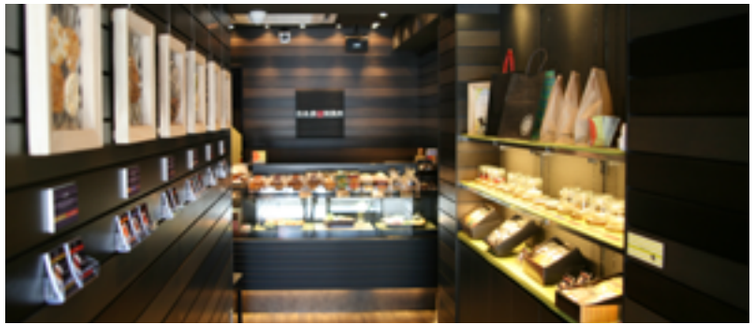
今回の展示では、てぬぐいが持つ軽さと耐久性を生かしたバッグやエプロンをはじめ、肌ざわりのよさを実感できるサウナガウンやターバン帽子を販売。てぬぐいの素材の長所をもとに使いやすいデザインを施した雑貨の数々が、会場を彩りました。また、リサイクル製品のみならず、学生が注染の技法を学び、柄をデザインしたオリジナルてぬぐいも販売。スカイツリー風のタワーが描かれた夜景柄や、江戸切子グラスをモチーフにした柄など、斬新なデザインが来場者の方々の目をひきました。

女子美生のアイデア光る「おいしい出会い」

8月6日から9月8日まで、日本橋錦（にしき）豊琳（ほうりん）本店にて本学との共同企画である「お菓子 project」が開催されました。国内産米100％使用した煎餅や、鹿児島県産のきび糖を使ったドーナツかりんとうなど、素材本来の自然な風味を大切にした菓子を作り続けている日本橋錦豊琳。今回のテーマは「自然」。自然由来の素材で作られた菓子を新しいイメージで提示してほしい、との依頼に芸術学部メディア表現領域3年生の学生が取り組みました。

期間中は、店舗の扉を開けた途端、夏らしい雰囲気を感じられるような演出や、展示・包装に統一感のある企画を提案。店内ディスプレイで使用されている木のフレームやコースターは、テーマである「自然」と共に涼しさも感じられ、お客様にも好評でした。なかでも、切り紙やスタンプがあしらわれた手提げ袋、紙袋が女性のお客様に大人気だったとのことです。またリサーチに基づき、じっくり商品を選んだり、全商品の試食が気軽にできるシステムも提案・導入し、こちらも好評だったとの報告をいただきました。

今回のコラボレーションショップは、視覚や触覚だけではなく、音楽や香りによる聴覚や嗅覚、そして試食をすることで味覚を使用。まさに五感で体感できる新しいイメージの菓子店舗が実現しました。



NEWS & TOPICS

01 萩尾望都客員教授、紫綬褒章受章

芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域客員教授の萩尾望都先生が2012年、春の叙勲で紫綬褒章を受章されました。紫綬褒章は学術・芸術・技術開発などの分野での活躍された方に贈られるものです。40年にもわたり、少女漫画という分野を切り開いてこられた萩尾望都先生の功績が認められました。女性漫画家としては、長谷川町子さんに続く2人目、そして少女漫画家としては初の受章です。9月10日には杉並キャンパスに来校され、特別講義を通して学生たちに刺激を与え、大きな励みとなるお話をしてくださいました。

萩尾望都

福岡県大牟田市出身。日本SFクラブ、日本漫画家協会に所属。主な作品は『ポーの一族』『11人いる！』『トーマの心臓』『半身』『イグアナの娘』『残酷な神が支配する』など。舞台化、ドラマ化されている作品も多数。2010年Comic-Con International（アメリカ）にてInkpot Award、2011年日本漫画家協会賞にて全作品に対して第40回文部科学大臣賞を受賞。

02 卒業生の江口美幸さん、春陽会賞を受賞！

小さな願い /F130/ 油彩

第89回春陽展で2001年芸術学部美術学科洋画専攻卒業生の洋画家、江口美幸さんが、春陽会賞を受賞しました。在学中から春陽展に出品、2011年の奨励賞受賞に続く快挙を成し遂げました。江口さんは受賞について「仕事をしながら制作を続けることは決して簡単なことではありません。けれども、女子美で出会えた友人の支えや応援があったから、このような大きな賞をいただけたのだと思います」とお話されていました。

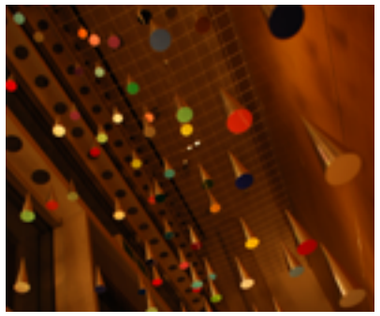
03 会議室が、空港ラウンジに？

マネックス証券株式会社が主催する現代アーティストの公募プログラム「ART IN THE OFFICE」の2012年度アーティストとして、芸術学部洋画専攻の福士朋子准教授が選ばれました。マネックス証券株式会社本社のプレスルームの二面の壁に展開された飛行機や空港にまつわる作品は、会議室にいながらにして空港のラウンジにいるかのような不思議な感覚を誘います。展示作品閲覧は予約制、詳細はotoiawase@a-i-t.netまでお問い合わせください。

05 古代ゾウムシ、グランプリに輝く

5月に開催された「四日市萬古陶磁器コンペ2012」で大学院美術研究科修士課程美術専攻工芸研究領域(陶)、奥村巴菜さんの作品『古代ゾウムシ』がグランプリを受賞しました。公募テーマは「どうぶつ」。奥村さんは昆虫を題材に想像上の生き物を創作。作品全体から放たれる迫力と、足や背中といった細部にわたる緻密な表現力が、高く評価されました。

04 内なる感情がショーウィンドウを彩る



静岡県コンベンションアーツセンター、グランシップ主催の「グランシップアートコンペ2012」で大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域、加藤広子さんの作品『バトスのはばたき』がグランシップ賞を受賞しました。ショーウィンドウを展示の場としたアートコンペのため、見る位置や視線を意識した作品を制作、その世界観が高く評価されました。受賞作品は3月から5月にかけて、グランシップのショーウィンドウを飾りました。

06 鮮やかな色彩が不思議な世界へと誘う『山猫の恋』

2008年洋画専攻の卒業生、玉利美里さんの作品『山猫の恋』が、「トーキョーワンダーウォール公募2012」でトーキョーワンダーウォール賞を受賞しました。この公募展は平面、立体作品部門合わせて1000名近い応募者の中から14名の受賞者が選出。受賞作品は東京都現代美術館での展覧会と東京都庁壁面に展示されます。新進気鋭の作家のひとりとして注目されている玉利さんの今後の活躍に期待です。

12 金の龍を修復

青梅市で江戸時代から続く祭「青梅大祭」で神事で曳行（えいこう）される山車。青梅大祭の山車には囃子座とともにそれぞれの町内だけの人形が載っており、その台座を囲むように幕張りがしてあるのが特徴です。今年の本祭りに向けて、工芸専攻が森下町の山車幕の刺繍を修復しました。緋羅紗（ひらしゃ）に金糸で三体の龍が刺繍された豪華な幕は、丁寧な修復を施したことで、より一層輝きがましていました。

11 創立者横井・佐藤記念特別奨学金授与

本学創立110周年記念事業の一環として、2012年度より創設された『創立者横井・佐藤記念特別奨学金』が大学院生3名、芸術学部生6名、短期大学部生3名、合計12名に授与されました。この奨学金は、本学在籍の学業成績、制作活動が特に優れた学生を顕彰するものです。7月20日に杉並、相模原両キャンパスで授与式を開催、奨学生には副賞として50万円の目録が手渡されました。

08 子どもの元気な姿がエネルギー源！

AXISギャラリー主催、金の卵 オールスターデザインショーケースにプロダクトデザイン専攻3年、難波有希さんの『エネランドの提案』が入選しました。第7回目を迎えた本展のテーマは「スマートライフ＝エネルギー再考＝」。難波さんの提案内容は、公園に発電機能がある遊具と蓄電器を設置するというもの。公園に子どもが専用蓄電池を持参、遊んで発電した電力を自宅に持ち帰り各家庭で利用することが評価されました。

commmons / avex entertainment Inc.

07 東京TDC賞2012で、RGB賞受賞

短大デザインコースの伊藤雅敏教授といすたえこさんがアートディレクションを担当し、宮本拓馬さん、林洋介さんの4人で作り上げた作品『口口口（クチロロ）「CD」(CL. commmons)』が、東京タイプディレクターズクラブ主催の「東京TDC賞2012」でRGB賞を受賞しました。4月1日、受賞者によるデザインフォーラム「TDC DAY」が杉並キャンパスで開催。約6時間にもわたり実施されたトークセッションには、多くの方が集まりました。

13 公募展受賞者紹介

大垣市展2011
市展賞

伊藤美奈子
芸術学部絵画学科日本画専攻4年（受賞時3年）

ハマ展2011
東美賞

多田彩乃
芸術学部美術学科日本画専攻4年（受賞時3年）

ビエンナーレうしく
入選

慶野智子
芸術学部美術学科日本画専攻3年

第12回KAJIMA彫刻コンクール
模型入選

荒木美由
大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域2年

帆足枝里子
大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域2年

第28回 読売広告大賞「読者が創る広告の部」
協賛社賞（富士急ハイランド）

中原里菜
芸術学部メディアアート学科4年

第89回 春陽展
入選

滝沢未那
芸術学部美術学科洋画専攻3年

矢澤せきみ
短期大学部研究生美術コース（絵画）

10 幼稚園児と女子美生がコラボワーク

6月12日、アートプロデュース表現領域の2、3年生が聖心学園幼稚園、園児160名へのワークショップを行いました。「うみ・まち・もりをつくろう」というタイトルのもと学生の描いた「海」や「街」「森」の背景画に、園児全員が描いた魚や動物、建物や車を次々と貼って完成。必修科目の授業内取り組みとして実施したワークショップでしたが、子どもの無限の可能性を発見できる大切な経験となりました。

09 さまざまな「経験」からアートの可能性を探る

2011年2月にタブロイド紙『Na+』を発行した大学院修士課程芸術表象の学生が参加したプロジェクト「A critical on contemporary Art」が、第2号となる『Ra+』を5月に発行しました。『Ra+』の特徴は学生自身が構成、編集、執筆を手がけていること。『Na+』は「ナショナリズムと芸術生産」がテーマ、今回の『Ra+』は「経験と芸術生産」をテーマに制作しました。定価500円、原美術館等で取り扱っています。

女子美染織コレクション展 Part2
沖縄の布 ―未来を紡ぐ―

沖縄では、豊かな自然の恵みを受けながらアジア文化の交差点として「花織（はなおり）」「絣（かすり）」「芭蕉布（ばしょうふ）」「紅型（びんがた）」などハイブリッドな織物や染物が創出されてきました。本展覧会では女子美染織コレクションより琉球王国時代の伝統的な染織品と本学とゆかりの深い沖縄の現代作家の染織作品を展示いたしました。会期中にはトークイベントを開催し、出品作家に自らの作品について語っていただきました。南国の開放的なイメージだけでなく、繊細で緻密な手仕事の伝統が息づいていることを再認識していただけたのではないでしょうか。また素材にこだわり、斬新なデザインに挑戦する新たな試みを繰り広げている作家の作品には、沖縄の、そして日本の染織の未来が予感されます。琉球・沖縄と本学をつなぎ、その思想を受け継いだ作品をご覧いただくことで、新たな可能性を見出していただけたことと思います。

JAM 展覧会報告①

5/21(月) → 6/17(日)

JAM 展覧会報告②

国立台湾芸術大学・女子美術大学交流展

4/7(土) → 5/13(日)

本学が学術交流協定を締結している国立台湾芸術大学との交流展。本展は芸術学部美術学科洋画専攻版画研究室が企画、両校の教員や学生61名の版画作品を主に展示しました。台湾から副学長、教授、学生が10名来日し関連イベントに参加されました。

拝啓、美術様 女子美術大学美術館収蔵品展

7/11(水) → 7/30(月)

芸術学科4年生の企画展。企画のコンセプトは、女子美術大学の収蔵作品約40点に対し、その想いを学生が「作品に宛てた手紙」という形で「告白」すること。手紙という形式を介することで、鑑賞者にとって「美術は難しい」といった先入観を取り払いやすくなり、作品と向き合うことのできる展覧会となりました。

JAM 展覧会予告

9/8(土) → 10/21(日)

アンコールのヴィーナス ―BAKU 斉藤の視線―

BAKU 斉藤が撮影したカンボジアのアンコール遺跡群の写真から文化の記憶をたどります。本展を通じて、私たちの記憶にアジアの人々が築き上げた壮大な文明を刻むとともに、人類が共有する美の遺産を次世代に継承する術を考えます。

10/27(土) → 10/29(月)

造形さがみ風っ子展

相模原市教育委員会主催による、小中学生の作品展です。

女子美ガレリアニケ 展覧会報告

平成23年度
女子美術大学美術館賞受賞者作品展

4/6(金) → 4/14(土)

平成23年度女子美術大学美術館賞を受賞した学生9名の作品を展示。

平成22・23年度合同
女子美アート・セミナー通年講座作品展

4/21(土) → 4/28(土)　前期　日本画／デッサン／クロッキー
5/12(土) → 5/19(土)　後期　ボタニカルアート／銅版画・リトグラフ

女子美アート・セミナー通年講座受講生が制作した作品を展示。

Collect 女子美術大学短期大学部GP
障がい理解とアートフィールド参画への取組 収集作品展

5/25(金) → 6/16(土)

本学短期大学部GPの取組のなかで収集された作品や資料、ポスターを展示。

「自由選択で作る自分だけのカリキュラム」
女子美術大学短期大学部 I年前期 学生作品展

7/2(月) → 8/7(火)

本学短期大学部I年次の自由選択授業で制作された学生作品を展示。

ポスターにできること。
女子美術大学×電通 人権ポスター学生作品展

8/26(日) → 9/8(土)

人権アートプロジェクト2012に参加した本学の学生作品を展示。

女子美ガレリアニケ 展覧会予告

9/15(土) → 10/6(土)

沖縄県立芸術大学×女子美術大学
教育・学術交流協定締結記念 大学院生作品展

「平成24年 沖縄県立芸術大学と女子美術大学との教育・学術交流に関する協定」締結に伴い、本年度より両大学院の授業科目において単位互換プログラムを実施いたします。本展はその記念展として開催し、美術を志す学生がより密接に作品と語り合える場をつくりだすことで、両校の作品制作の質の向上と芸術文化の交流を深めます。

10/13(土) → 10/28(日)

ドキュメンタリー アニメーション
「琉球王国 MADE IN OKINAWA」展

映像作品のプロデュースやディレクションを手掛ける女子美術大学同窓会会長の木下小夜子さんが制作した、約18分のドキュメンタリーアニメーション「琉球王国 MADE IN OKINAWA」と制作に関わる絵コンテや調査研究資料を展示します。

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報課
監修担当　山本吉男・林規章
デザイン協力　株式会社 Kitchen Sink.
印　　刷　株式会社 ヒーローズ
発行日　2012年9月15日

©2012 学校法人女子美術大学

広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報課までご連絡ください。

広報課
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL http://www.joshibi.ac.jp